

平成 28 年 1 月 27 日

南の風 170

南部ミニバスケットボール連盟
会長 藤原 敬一

169号の続きです。ご承知のようにキックアウト（中をドライブで突いて、外に合わせるプレイ）は、中から外へのファーストパスへの対応は何とかできます。（高校生のレベル）しかしマンツーマンでもゾーンでも、ドライブに対してヘルプに行くとローテで外（特に3ポイントシュート）への対応は遅れます。さらに言えば外にパスを出されて、もう一つパスを回されるとほとんどシュートは打たれてしまいます。岐阜女子は後半、桜花のローテの遅れでシュートを打つことが多かったです。前述した通り、桜花の足が止まったことは事実です。ですが、シュートを決め切る岐阜女子のスキルの高さは、目を見張るものがありました。最後に、桜花の対応にやや遅れが出た原因に、岐阜女子7番ファターの存在があります。ドライブされた時、桜花のディフェンスは、ファターへのパスをどうしても警戒します。その分外への対応が遅れ気味になったのです。

②についてです。岐阜女子7番ファターも桜花10番ステファニーも、運動能力、身体能力は並外れています。甲乙付け難いものがあります。ただ決勝のゲームに関しては、『メンタリティー』と『モチベーション』の部分でファターがステファニーを上回ったと感じました。それは単純に、ファターの得点20点、ステファニーは6点という点差以上のものがあったと思います。ファターの「ステファニーには絶対負けない」というメンタリティーの強さが、ゲーム全体を通して表れていました。スキルで見ると、しっかりとしたポストでのポジション取り、スクリーンからの合わせ、そしてステファニーとの1対1の時のフックシュートに表れていました。一方ステファニーは、ポストでのスピントーンシュートやリバウンドに非凡なプレイを見せるのですが、単発でした。ファターのディフェンスが機能していました。やはりインターハイと国体の負けが、ファターの負けじ魂に火をつけたのでしょう。（もちろん岐阜女子の選手全体に言えますが）モチベーションの高さが勝った対決でした。

③についてです。両チームともフロントコートオフェンスは、モーションオフェンスでした。桜花で言えば、10番ステファニーと8番栗津をミドルポストの外に出し、ペイントエリアを空けます。トップとウイングは1対1を仕掛けたり、ウイングとの合わせをしたりして攻めます。パスが入らなければ、外に出ている10番ステファニーと8番栗津をスクリナーとして使い、2対2で合わせます。一方岐阜女子は、7番ファターをいきなりポストで使う場合もありますが、入らなければ外に出します。そして逆サイドに、10番の大橋や4番の村瀬を配置してスクリナーとして使います。ご承知のように8クロスは、パターンオフェンスではありません。1対1の狙い目、または合わせからのアウトナンバーの攻めが優先されます。その辺が両チームともしっかり鍛えられていました。

ディフェンスです。両チーム終始マンツーマンでした。お互い知り尽くしているチーム同士ですので、しっかりマッチアップを決め、外を簡単に打たせないというディフェンスでした。特にボールマンに対するプレッシャーとボールトレースの徹底は迫力がありました。桜花は1Pで約4分間ノーゴールでした。岐阜女子の『気迫』と『意気込み』が強く感じられました。一方桜花は、簡単に3ポイントは打たせないことを5人が意識して守っていました。意地と意地のぶつかり合いのディフェンスでした。